

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

# R&V 31号

1998年10月~12月



ACC-J 茨城

# 目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 98' 秋 No31



ハヶ岳広河原沢3ルンゼを登る 《Photo By Motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集  
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

## 山仲間・ザイル仲間

1人の人間の周囲には大勢の友人・仲間がいるといわれますが、その中で山仲間・ザイル仲間には特別な友人関係・仲間意識があると感じるのは私1人ではないと思う。ACC-J東京の名雪氏の言葉を借りると『山仲間・ザイル仲間は同じ釜の飯を食った仲間であり、お互いに命を助け合った仲間で、一般社会では得られない貴重な存在である』と言うのが全く同感である。古風な言い方をすれば戦友であり、極限状態の中、固い緒で結ばれた仲間意識は一種独特なものがある。

登歩渓流会の松濤明氏は冬の北鎌尾根で遭難し、パートナーの有元克己氏に付き添い壮絶な死を遂げるが、その最後の手記の中で『有元ヲ捨テルニシノビズ死ヲ決ス』と記している。私にはここまでの友情が貫けるかは自信はないが、古くからの山仲間の間では、山の中で何を考えているかがある程度は推測出来る事がある。例えば、冬山の吹雪の中でテント設営の時など誰の指示が無くても次の行動を各自が分担し、短時間のうちにテント設営が出来上がってしまう。また、岩壁の登攀中にお互いの姿が見えなくても2人を結んでいるザイルの動きでパートナーの状態が推測出来るし、岩壁の核心部を登攀中のパートナーの万一の事態にも身構える事が出来る。また、もし山岳会の仲間が遭難したとしても事前に山行計画書の提出があれば、留守

部隊が救出に向かうにしても遭難パーティの立場に立って考えて、彼ならこのような行動をとっているだろう。彼ならこう対処している事だろう。と推測して迅速で的確な救助体制が確立出来るのではないかと思う。山岳会メンバーの間には年齢差があり、また生活基盤も異なり、山に対する考え方が様々なので、同一視する事は出来ないが、相互の信頼関係がなければザイルを結び、命を助け合う事は難しいのではないかと思う。しかし、その反面相互の信頼関係を保つ為には努力が必要である。岩壁登攀技術の研磨、セルフレスキュー技術の習得、救命救助技術の習得、救助装備（ビーコン、スコップ、ゾンデ棒）の携帯等、各人の努力と自覚が必要な事は言うまでもない。我々の山岳会は慈善団体でも教育機関でもない。単なる山が好きな仲間の任意団体であるので山岳会メンバーの多少の出入りはやむを得ないと思うが、縁があって入会した山岳会で知り合った友人関係、仲間意識はいつまでも大切にしたいと思う。我々は登山を通じて、山に学び、様々な判断力を養い、困難に耐える忍耐力を培い、その過程で知り得た山仲間と今後も山に登りたいと考えます。

(木村一)



## 《目次》

1998年 秋号 10～12月 ACC-J 茨城

---

|                        |        |
|------------------------|--------|
| 山仲間・ザイル仲間              | ・・・ 1  |
| 集会報告                   | ・・・ 3  |
| 山行報告                   | ・・・ 4  |
| 指導員講習会（御岩山編）           | ・・・ 5  |
| 赤谷川本谷廻行                | ・・・ 5  |
| 西上州・桧沢岳北西稜             | ・・・ 8  |
| 西上州・立岩南東稜              | ・・・ 9  |
| 西上州・高岩～稲村山             | ・・・ 10 |
| 谷川岳・一ノ倉沢本谷下部（出合～本谷バンド） | ・・・ 12 |
| 指導員講習会（笠松運動公園編）        | ・・・ 13 |
| 《はじめちゃんの思い出日記》（part 7） | ・・・ 14 |
| 鳳凰三山縦走                 | ・・・ 15 |
| 日原周遊（カモシカ山行）           | ・・・ 16 |
| 大菩薩・石丸峠～笹子峠（カモシカ山行）    | ・・・ 19 |
| 仙ノ倉山北尾根                | ・・・ 20 |
| 八ヶ岳広河原三ルンゼ             | ・・・ 21 |
| エビス尾根（仮称）偵察            | ・・・ 22 |
| 鍋足山                    | ・・・ 23 |
| 友好山岳会団体の月報・会報・その他      | ・・・ 25 |
| 編集後記                   | ・・・ 27 |

---

表紙写真…雪のなくなった一ノ倉沢本谷

## 集会報告

(於、スカイラークガーデン)

### -----【 1 0 月 】-----

1 0 月 7 日

出席者 本図、古山、菊地、木村、笹平、生井、高木

1 0 月 2 1 日

出席者 本図、古山、木村、菊地、笹平

### -----【 1 1 月 】-----

1 1 月 4 日

出席者 本図、木村、菊地、古山、笹平

1 1 月 1 8 日

出席者 本図、古山、木村、菊地、鯉河、生井

### -----【 1 2 月 】-----

1 2 月 2 日

出席者 本図、古山、菊地、木村、笹平、中島

1 2 月 1 6 日

出席者 本図、古山、木村、菊地、笹平、生井

# 山行報告

《 1998年 10月～12月 》

## ---【 10月 】---

|         |                     |           |
|---------|---------------------|-----------|
| 10月3～4日 | C級スポーツ指導員養成講習会(御岩山) | 笹平        |
| 10月 11日 | 赤谷川本谷               | L本図、高木、生井 |
| 10月 25日 | 西上州・松沢岳北西稜          | L本図、高木    |

## ---【 11月 】---

|           |                        |              |
|-----------|------------------------|--------------|
| 11月 1日    | 西上州・立岩                 | L本図、高木       |
| 11月 3日    | 高岩～稲村山                 | L本図、他1名      |
| 11月 8日    | 谷川岳・一ノ倉沢本谷下部           | L古山、本図       |
| 11月 8日    | C級スポーツ指導員養成講習会(笠松運動公園) | 笹平           |
| 11月22～23日 | 鳳凰三山縦走                 | L古山、本図、笹平、生井 |
| 11月 29日   | 雲取山長沢背稜(カモシカ山行)        | L古山、本図       |

## ---【 12月 】---

|         |                     |           |
|---------|---------------------|-----------|
| 12月 6日  | 大菩薩・石丸峠～笹子峠(カモシカ山行) | L古山、本図    |
| 12月 13日 | 仙ノ倉山北尾根             | L古山、本図、笹平 |
| 12月 20日 | ハヶ岳・広河原沢3ルンゼ        | L古山、本図    |
| 12月 23日 | エビス尾根偵察             | L本図、菊地    |
| 12月 27日 | 鍋足山                 | L本図、他1名   |

## 指導員講習会

(御岩山 編)

1998. 10. 3~4

受講者 笹平孝

今回、C級スポーツ指導員の講習会があると言うので登山の知識を得るため受講することにした。

岩登り技術(講習会)は御岩山でやる事になった。まずは救助訓練からで林道の少し広い所でロープを使って担架を作って、負傷者として役員の人を6人がかりで岩場の所まで搬送した。1番前側と後側では前側の人が大変だった。ポジションを時計回りで交代しながら搬送を行った。

岩場では、負傷者を背負って降ろしたり、逆に負傷者役になって背負われたりした。岩場が垂直でないで背負っているときは体重がかかるので、特に降り初めの時が大

変だった。後、懸垂下降中に途中で仮固定して、両手を離したりした。これはザイルが重いので引き上げて縛るときに足でザイルを押さえてやっと楽にできた。

一通りやったところで2人1組になって岩登りのテストをした。他の人より先にテストをしたので他の班に行って指導の訓練をした。

屋内実習では、負傷者の背負い方や負傷者をロープで持ち上げるやり方などもやった。それと天気図を書くテストもやり、御岩山での講習会は終了した。

(笹平 記)

## 赤谷川本谷遡行

1998. 10. 10~11

パーティ L 本図一統、高木博行、生井一男、高橋弘(別パーティで同時行動)

いつもの集合場所である下館の市役所に集合し、赤谷川を目指し車を走らせた。今回のパーティは元浦和浪漫会員の高橋氏が同行するとの事。私は初めてお会いするので、ちょっと緊張してしまう。元来、自分は人見知りしがちであり人と話すのにもとても労力を要するタイプの人間である(気が小さいのである)。

今回は単に遡行だけでは無く、本図さんはドウドウセンの偵察も兼ねているようだった。

車は猿ヶ京より川古温泉に向かい、更に林道を突き進んで行く。するとゲート手前に大きなテントが張ってあった。そのすぐ脇に車(デリカ)は止まった。するとテントから人が出てきて本図さんと挨拶をしている。このテントの持ち主が高橋氏であった。坊主頭でちょっと見は恐そうなのだが、話してみるとこれがまた気さくな人だった。彼のテントに集まり一杯やりながら明日の行動とか色々な雑談で宴に花が咲き、今回のチームの足並みも整ったようだ。

翌朝、林道を車で入れる所まで入って行き(途中のゲートの通行は、例の通行手形を使用し難なく通過)ちょっとした広場に車を止め、後はひたすら入渓点まで林道を歩く。いい加減に嫌になったころ沢への下降点に到着。エビス大黒沢の出合から遡行開始。今まで一般人として生活していたのに10月という時期にまさか遡行をするとは、(以前10月に南紀の池郷川に行った事があったが、あの時はウェットスーツ装着のお陰で余り寒さは感じなかったが、今回はウェットスーツは装着していない)“絶対に体を濡らさないぞ”と心に誓い遡行して行くと、

最初の大きな淵が出てきた。まさか泳ぐのかと思ったが、どうやら右岸をへつって行くことが出来るようで、本図さんを先頭に高木と私、そして高橋氏の順でへつりを開始したが、岩場のトラバースで足首まで水に入れば良かったのだが、それをするのが嫌でどうしても濡らさないぞと、無理な体制でトラバースをしようとしたのが間違いであった。“あっ”と思った瞬間、奇麗に後方にプッシュ飛んでしまった。“ビシャ〜ン!”という音と共に全身ビショ濡れ。もうこうなったら何も恐くないやい。後ろから高橋さんは、

『もう少し落ちるのを待ってもらえたら、決定的な写真が撮れたのになあ、残念だなあ』

と、言いながら笑っておられた。全く自分が情けない。ビショビショになってしまったが、思ったより寒くはなかった。着替える事も出来ずビショビショな体で遡行を続けた。

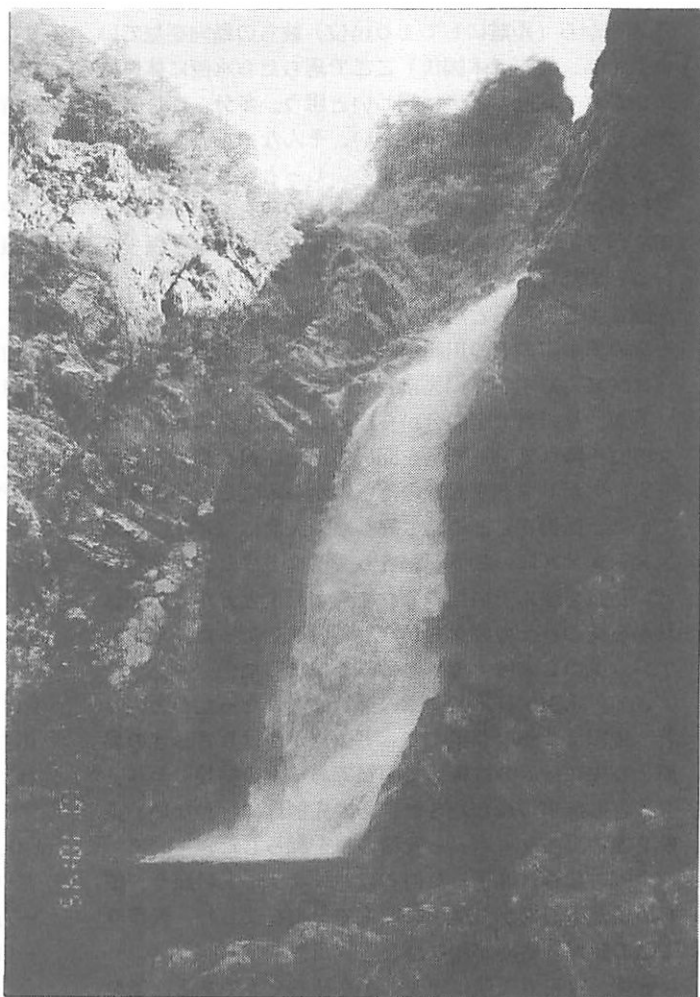
巨岩が乱雑に積み重なって出来た幾つもの小さな滝を上にも下にも、そして越えられ無い所は高巻きし進んで行くと、いきなり開けて裏越ノセンに到着した。そこは大きな淵になっていていよいよ泳がなくては駄目かと思うくらい水を湛えていた。裏越のセンを良く見てみると滝の内側を通れるような感じであった。が、水量を考えると滝の裏を通る時にかなり濡れてしまう気がして、私達は徒渉しようかどうか躊躇してたたずんでいた。すると、高橋さんがトットコ、トットコと滝の方へ歩いて行ってしまった。彼を目で追いながら様子を見てみると、濡れずに難なく滝の内側を通り抜けて行ってしまった。

『ナンダヨ〜、濡れないで通れるじゃん』と、彼の後を追う様に我々も続いて行った。

裏越ノセンを越した辺りから先はゴルジュとなり、その先にドウドウセンがあるようだがここからでは良く分からない。今回はここから我々は大高巻きをする事にした。右岸の尾根ぞいにひたすら登り、本図さん、高橋氏の誘導でひたすらブッシュの中を藪こぎ、ヤブコギでとても人間技じゃない高巻きだった。4人組の中で私だけが唯一の一般人である。本図、高木、高橋の3人はもう鬼神のような勢いでブッシュの中を突き進んでいく。私は久しぶりの山行とあってか、とても先行している本図さん、高木についていけない。ヒィヒィ言いながらどうにか尾根のピークに着いた（その時はもう鼓動はドキドキ、目眩はクラクラ、負けそう、負けそう、私、ピンクのクライマーなんてネ）。

さて、先行コンビは何処に行ったかと周りを見回すがブッシュで本図さん、高木の姿が見えない。いったい何処に行ったんだ…？。『本図さ〜ん、何処ですか、本図さ〜ん』と叫ぶと、すると『おう！こっちだ』と声がした。『ん〜何処だ』と辺りを見回していると、『あそこですよ、下、下、あの木の所』と後ろから高橋さんが指差しながら言った。高橋さんは遅い私に付き合っ〜て一緒に付いていてくれたのだった。下を覗くと、ずっと下に赤谷川が流れていた。だいたい尾根を上がって高巻いてしまったと思いながら、さっき本図さんの声がした方を見ると斜面の木々が揺れていた。順々に斜面を下の方に木々が揺れていく。彼等は沢に向かって下っているようだ。我々も沢への下降を始めた。が、この下降が今回非常に恐かった。足下はやたら滑るし、手がかりにするブッシュが小さいし所々無い場所があり、ここでもし滑落すればドウドウセンまで一直線に落ちていってしまう。多分、一気に振り出し（出合）まで流されて違う名前になってしまうんじゃないかな。そんな事を頭の片隅で考えながら草付き斜面を滑りながらありとあらゆる方法を駆使して、赤谷川の沢床に降り立った。降りた所がドウドウセンの落ち口でザックをおろし、ドウドウセンの落ち口の所から下を見る。『ん〜ん、何だこりゃ、滝壺があるが、その下の落ち口が無い。どうなっているんだ？。水は何処へ流れているんだ』と独言をいいながら、尾根の方に廻り込んでみると、見えた見えた。ダムのように幅1m位の岩板の堤防があり、その真中辺りから水が流れていた。ダムの放水みたいだな。「どうしたらこんな風に穴が開くんだろう。自然の神秘だ」と一人、感心してしまった。

ここを偵察するというのがどうするんだろうと思いながらドウドウセンの水の流れを眺めていた。暫く眺めた後、



裏越ノセン

まずはビバークサイトを探そうと川原を上流の方に探していく。少し上に上がった所に格好の場所があったので、早速、整地してツェルト2張りを張って今宵の宿は完成した。一息してから、ドウドウセンの偵察に行こうと準備をする。やっぱり俺がドウドウセン偵察の相棒だろうなぁと心の準備は出来ていたのだが今回は高木に取られてしまい、私はギャラリーになってしまった。

最初は、滝の上部から懸垂で降り立とうというプランであったようだがうまくいかず、さっきの尾根側に少し上がった所から懸垂でドウドウセンの釜の自然の堤防の所へ降りていった。そして左岸の壁に取り付き、ハーケンとボルトを打ってそれで高木がビレー、本図さんがトップで左岸の壁を廻り込んでいった。が、10m位廻り込んだ所から先の壁がすっぱり切れている。今、本図さんがいる所はスタンスは安定しているようだが、足下から下は垂直になっていてその下は滝がありすごい唸りを上げ流れている。こんな所を渡って下の方へ偵察にいくなんぞ、人間技ではない。こんな所を遡行しようなんて『あなた。人間やめますか？それとも人生やめますか』になってしまう。私と高橋氏は彼等を真っ正面から見

る場所から(距離にして10m位)彼らの動向を見ていた。もし、彼が(本図氏)ここで落ちたら水流に体を持っていかれて救助する事は難しいと思う。多分、ビレーしている高木もただでは済むまい。そんな事を考えると見ての方が冷や汗を流してしまう。じっと彼らを見ていたら何処からか『すみません。いったい何をやっているんですか?』と女の声が聞こえた。気のせいかなと思っているとまた『すみません。何やっているんですか?』と声が聞こえる。ふっと声のする方へ目をやると、ドウドウセンの落ち口の上の川原から女の人が顔を覗かせていた。『×××んですか?〇×♀ですね……』と何か言っているが、滝の音で全然分からない。すると高橋さんが彼女の方へ降りて行って話を聞いていた。良く見るともう一人の男がドウドウセンの落ち口から本図さん等を覗いていた。高橋さんとの話も終わって彼女は『♂〇〇君×××、×××にいこう』とさっきドウドウセンの落ち口にいた彼を読んでいたので、彼女が目上と分かったが、私から見るとその彼女もかなり若い感じだった。そしてアベックの2人は上流へと行ってしまった。

さて、本図・高木偵察隊の進行はどうなったかというと、先程よりかなり手こずっていたがやはりさっきの場所より先に行くのは極めて困難であるとの結論に至り、2人とも無事帰還した。あの先無理に行かないで正解である。我々もホッと安堵の息を漏らした。

今回の任務は終了したのでビバークサイトに戻り、偵察の状況を話しながら焚火を囲んで夕食を楽しむ。沢登りでこの時が一番心が和むひとときだ。

翌朝、今日も天気はとにかくも持ちそうである。釜を越え、小さな滝を越え、左岸に右岸にと廻行ルートをと

りながら本谷も上部まで来るとまるで溪相が変わってきた。ビバーク地までの様な荒々しさは無くなり、穏やかな清流が流れ川幅も広い美しいトロの連続する溪相になってきた。まるで今までの事が嘘のような気がする。途中、オジカ沢の頭へつめている沢と万太郎山へ続く沢の二俣から少し行った所にある枝沢をつめて大障子の頭の稜線を目差し沢をつめていく。よくよく嫌になる頃、クマザザの群生している所を藪こぎ、(いや、笹こぎかな)してようやく稜線についた。

稜線に出て、一休みしてから稜線を毛渡乗越からの降り口まで稜線をひたすら歩いた。途中、避難小屋があり、まだ新しそうなので小屋の中を見たが快適そうだった。毛渡乗越の降り口からこの登山道(越路)は地元の山岳会で整備しているのか下草がしっかりと刈られていた。しかし、やたらと滑り降りずらい道であった。あまり利用されていないのかな?..もう少し整備してほしいもんだと思った。半分滑りながらようやく出発点であったエビス大黒沢の出合まで戻った。

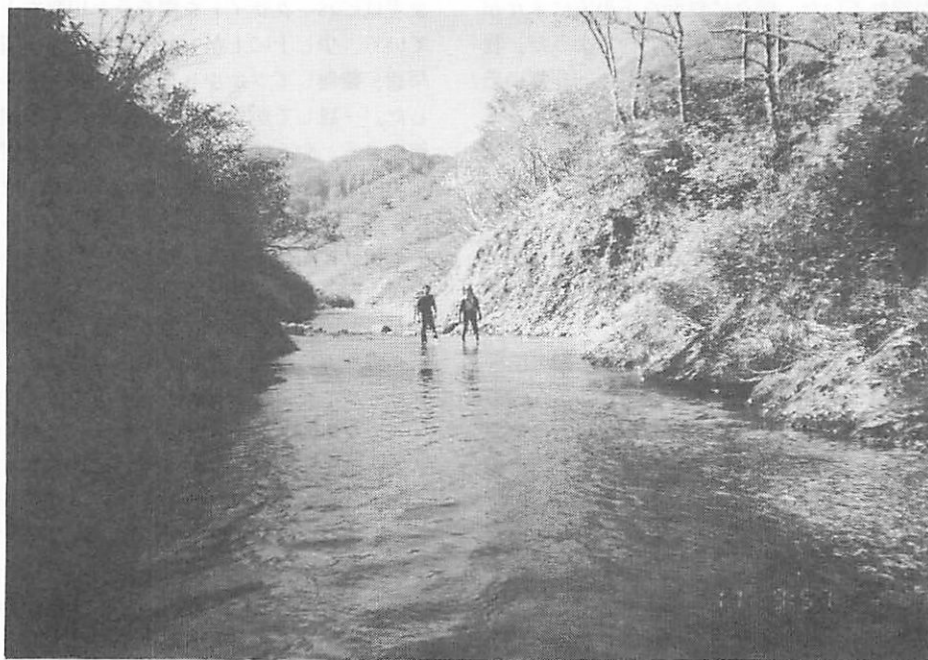
10月10日

川古林道(7:11)―入沢(8:51~9:12)―裏越のセン下(10:46)―ドウドウセン下(12:33)―ドウドウセン上(14:00)

10月11日

ドウドウセン上(9:24)―枝沢出合(10:49)―稜線(12:16)―万太郎山(12:46)―毛越乗越(13:19)―徒渉点(14:18)―車(16:25)

(生井 記)



赤谷川本谷上部

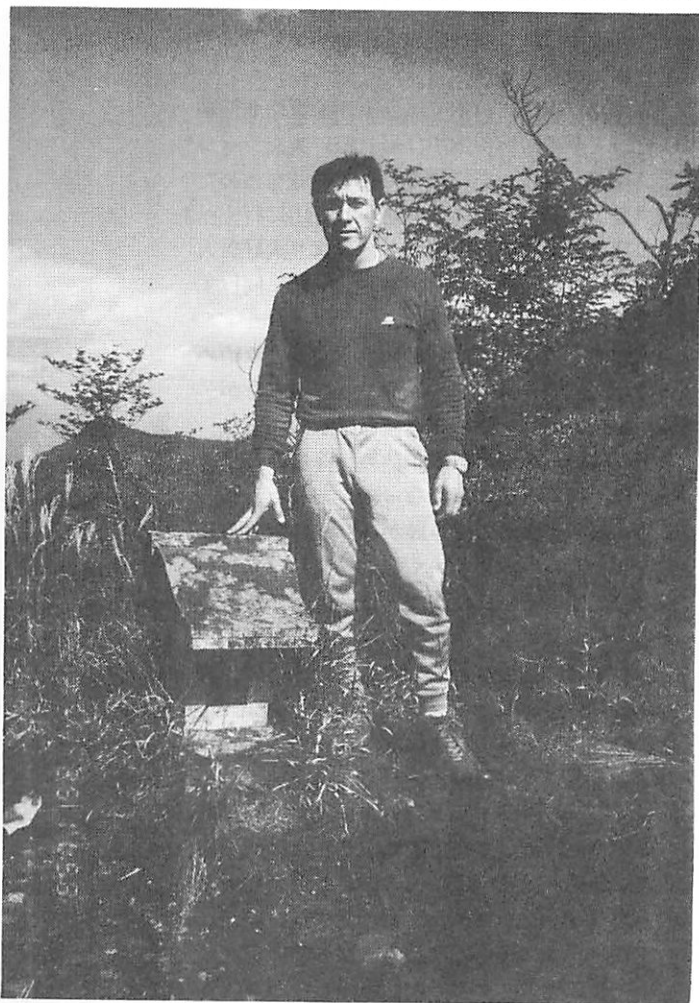
## 西上州松沢岳北西稜

1998. 10. 25

パーティ L 本図一統、高木博行

秋も深まり高峰は赤いドレスを脱ぎ白いものをまとい低山にも冬の足音が近づいてきた。木々は葉を落とし始め、山里では家々の軒下を赤く色付いた柿が飾り、薪を高く積み冬に備える。今年も西上州の季節が訪れた。今年で三年目になる西上州だが、入会一年目の毛無岩以来毎年九月のカレンダーをめくると西上州の山並みや山村ののどかな風情が目につく。松沢岳？聞き覚えのない山名だが今年も西上州は落ち着いたある晩秋の山々を楽しませてくれるだろう。

下館を本図さんのデリカで出発。車を買替えるため今回の山行が最後になるらしい。長い間ご苦労様。いつものように現地到着後、酒盛りを少ししてから就寝となる。翌朝は秋晴れの上天気、出発の準備をしていると散歩のおじさんが話しかけてきた。北西稜を登る旨説明すると「危ない、死んだ人もいる。」と忠告されてしまった。心配してくれているのだろう。山村の人々は素朴で親切だ。朝8時出発。尾根末端の植林を踏み跡をひろいながら左へ斜上していくとやがて尾根上へ導かれた。尾根上はまだ雑木林で落ち葉の上をひたすら高度を上げて行く。岩稜まではまだ時間がかかりそうなので落ち葉のザブトンの上で小休止。腰を下ろすと視線の端になにやら白い物が。ホンシメジだ。目を血のようにしてまわりを見渡す。すぐに本図さんがホンシメジの群生を発見し、きのこ採りとなる。ホンシメジは歴戦のつわものをも地に這わせた。自分も家計の足しにときのご採りに精を出す。程無く彼方が木々の間から望めるようになるが、視線は下方をさまよい山を見ていない。岩稜帯でもルートのことよりザックの中のキノコが潰れやしないか心配だ。やがて大岩稜に行く手を阻まれる。右からバンドをバース気味に廻り込むがいきなり引き返す。岩が硬ければ正面突破なのだろうが見るからに脆そう。仕方なく左から苔の生えたジグジグのルンゼ状の溝を泥だらけになりながら登り岩稜の上に立つ。岩稜上から6mの懸垂下降で尾根に戻る。岩にはたくさんの岩茸がついていて来年はお好み焼き用のへらを持参し、ユマーリングしながら岩茸採りでもしようかなどと考える。T字状のピークでは地形を確かめもせず先を急ぎルートを外れ本図さんに呼び戻される。そのあとは特に問題になるような悪場も無く懸垂下降でロープを使う程度で済む。やがて傾斜が緩むと石祠の祭られる松沢岳の西峰に着いた。



松沢岳頂上にて

予定よりだいぶ時間が早くのんびりと昼食を取りながら回りの山々の展望を楽しむ。見るだけで岩が脆くクライミングの対象になる岩場が少ないのが残念だ。西峰から隣の本峰を回り根草集落へ下る。根草集落の家々はかまどでもあるのだろうか、薪がたくさん積み上げてある。西上州を訪れるのは登山行為そのものより山里の素朴な雰囲気ひかれたのかもしれない。この素朴な山城に来年も訪れるだろう予感がした。

車(8:00)ー西峰(12:01~13:00)ー東峰(13:05)ー車(15:02)

(高木 記)

## 西上州・立岩南東稜

1998. 11. 1

パーティ L 本図一統、菊地光夫

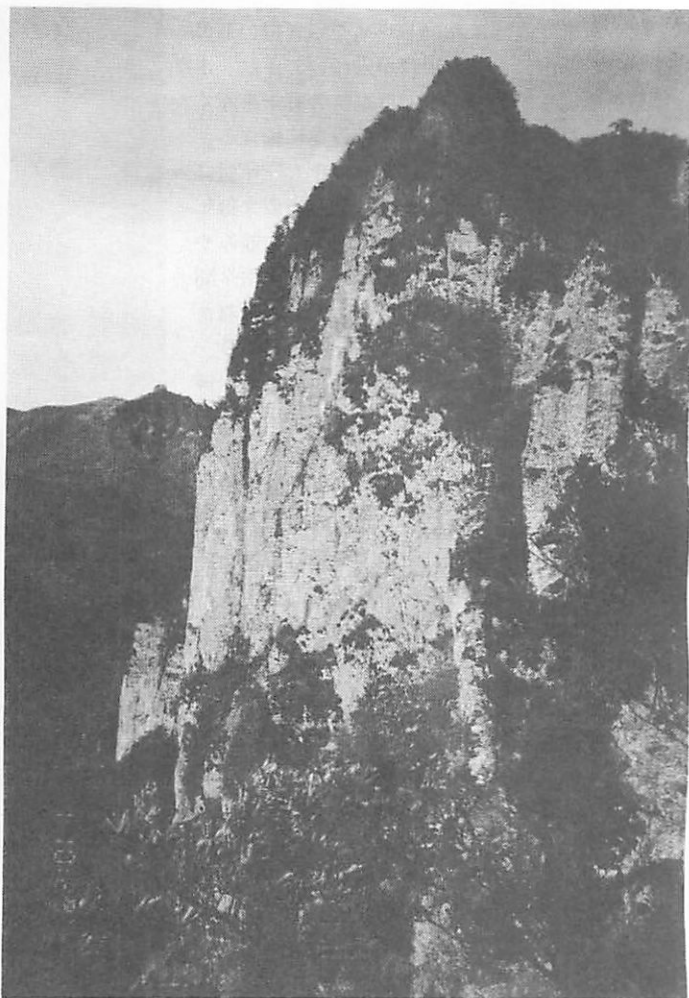
今回の山行は、西上州やぶ山シリーズ第2弾、立岩南東稜である。

先週は、本図、高木で、西上州松沢岳北西稜に行きその山行で途中、帰り際に大黒シメジをスーパーの袋一杯に採ってきて、味を占めたようで『今週もキノコ採りをかねて山に行くべ』との誘いを受けた。山菜、キノコ採り大好き人間の私、菊地が断るわけが無い。一緒に同行することにした。

立岩南東稜へは、中庭という所より登り始めるのだが、取り付きが少し分からなかったが、朝、起きて回りを眺めると何となくわかった。墓場の脇の段々畑の農道を詰め、林道の作業道をつめて行くと道は無くなってしまった。が、でも一部の登山者の踏み跡がありその踏み跡を1時間半ぐらい歩いていくと、左側に東立岩が少し見えてくる。この辺りより西上州の特色である岩肌が見える。小さな岩稜の所は、ザイルを出し登る。紅葉がとても良く天気も良い。大変気持ちの良い山行である。

この辺りから見る立岩はなかなかのスケールで回りの低い森があり、素晴らしい景色である。記録には、懸垂が1回とあるが、我々は懸垂はしなかった。そして登山道に出る。これより西立岩に向かう。途中にキノコのありそうな所を捜し捜し行くとクリタケの大きなシロを見つけ笛を吹き、本図氏を呼び2人で採る前に写真に納め、その後クリタケの姿を堪能しながら収穫した。その場を離れるとき本図氏は持ってきたステッキ（ストック）が無い事に気づき附近を探すが何処にも無い。良く考えてみるとさっき笛を聞いたときには手に持っていたので登山道の所へ置いてきた気がすると言うのである。ハイキングの人が何人も通っているので、誰かが落とし物と思い持って行ってしまったのではないかと思い、急いで上を目指しそれらしいハイカーを探すが分からず、途方に暮れた彼は一言『畜生！。来週も西上州の山へ行くから、今度は手ぶらで行って帰りには、両手にステッキを持って山から降りてきてやる』と豪語していた。

その後は、これといった収穫もなく下山道を下る。威怒牟幾不動滝の所で休憩でコーヒーを飲み、昼食を食べる。その後、午後2時半に中庭に戻る。途中、今登ってきた立岩が集落から見ると段々畑の下仁田ネギとぼつりぼつりとある家並みが何だかタイムスリップで昔前の



西立岩

古き良き故郷を感じさせ、何度も振り返り振り返り車に戻った。

車(7:30)－西峰(10:15)－本峰(11:35)－神社(12:13)－車(14:03)

(菊地 記)



クリタケの群生

## 西上州・高岩～稲村山

1998. 11. 3

パーティ L本図一統、他1名

今年の11月1日は日曜日であり、3日は文化の日で祭日である。普通の会社勤めの山屋は土曜日から4連休にして大きな山行が組めるところだが、我々零細企業はそんなこと言っていられないのが現状である。私に死ぬまで週休2日制なんてあり得まい。今、目の前のカレンダーで調べたら、週休2日制の人より年間50日以上多く働くことになる訳だ。それで生活はけっして良くないんだからやんになってしまう。ここでグチを言っても始まらないが、以上の理由により文化の日も日帰りで山に行くことにした。

上信越道のの上り線を軽井沢インター付近まで来た時、一瞬ではあるが正面に登攀欲をそそられる素晴らしい岩峰が出現する。岩質からいって岩登りの対象にならないのは分かっていたが興味のある所であった。地図で調べると高岩というらしい。ここに行ってみることにした。パートナーもいないことだし、前から山に連れて行けとうるさく付きまとう女性を連れて行くことにした。ハイキングだから、ちょうど良いパートナーともいえる。はっきり言ってこの女性は、かなり歳をくったオバンであります。

高岩だけではつまらないので、山の中をキノコでも探しながらほつき歩くことにした。入山口と下山口が違うので、予め下山口にバイクをデポして置くことにした。

デポ予定地点に着いてみると、寂しくてバイクなんかデポしておいたら持っていかれてしまいそうである。私のバイクはホンダのモンキーといって、若者に人気のある超小型の物なので、鍵なんぞかけておいても車に簡単に載せられるので心配なのだ。溪流釣りの時、林道を走るのに便利かと思い今年購入したのだった。

時間は夜中の1時を回っている。周りを見渡してみると、ちょっと離れた所に人家があり、電気がついている。ということは起きているかも知れない。その車庫にでも置いてもらえれば安心だ。家の前まで行ってみるが静かでシーンとしている。私には声をかける勇気がなかった。人間というものは何か取り得があるもので、オバンの図々しさが役に立った。こんばんは、こんばんは、と出てくるまで声を掛け続け、やっと青年が起き出したのである。青年はオバンの図々しさに圧倒され、表に出て来て車庫まで案内してくれた。この青年の実家は高崎にあり、週末だけここに来るそうだ。つまり別荘というわけか。どうりでログ風のモダンな建物である。まあこれで一先ず安心だ。入山口に向かう。

翌朝、西毛野外センターの門はシーズンオフで閉まっており、土手を登って中に侵入する。泥棒みたいだが、登山道はこの中から伸びているのでしかたがない。少々登りで雄岩の基部に着いた。いよいよクサリ場である。

妙義や西上州のクサリ場は、アルプスのクサリ場よりも遥かに悪い。ここもハングしており、完全に腕力登攀である。オバンにザイルを出しますかと声をかけたら、いきりませんよと返事が返ってきた。このオバンは若いとき、一ノ倉や滝谷を登った経験を持っているため、プライドというものがあるらしい。しかし、よる年波は隠せず足元はふらついて見える。雄岩の頂上は足がすくむほどの高度感である。

真下には軽井沢インターが、そして東から南にかけては妙義から西上州の山々が一望できる。私はこの山塊が好きで、若い時からずいぶんと通ってきた。殆どがバリエーションなので、その割りに立ったピーク数は少ない。この辺りに精通している打田氏の弁では、アルプスや谷川岳のバリエーションルートは難しくて行けないけど、一般ハイキングコースでは物足りない人に最適とのことだが、ミスれば待っているものは死である。確かにアルペンではなく、地味な山群だが油断は禁物だ。その地味なところが私は好きなのである。余計なことだが、私は女性も派手タイプより地味タイプの方が好きだ。

下りにかかる。先程のクサリ場の所で、ザイルはと言うと、大丈夫だと思っただけど、という自信のない返事。私はこの言葉を聞いて迷わずアンザイレンすることにした。テンションはなかったが、付けて正解だったと思うくらい、腕力のない女性にとっては悪く感じたに違いない。クサリ場の途中で単独のハイカーとすれちがう。相当緊張しているのが顔の表情から読み取れる。こちらがザイルを付けているので不安になったのだろう。

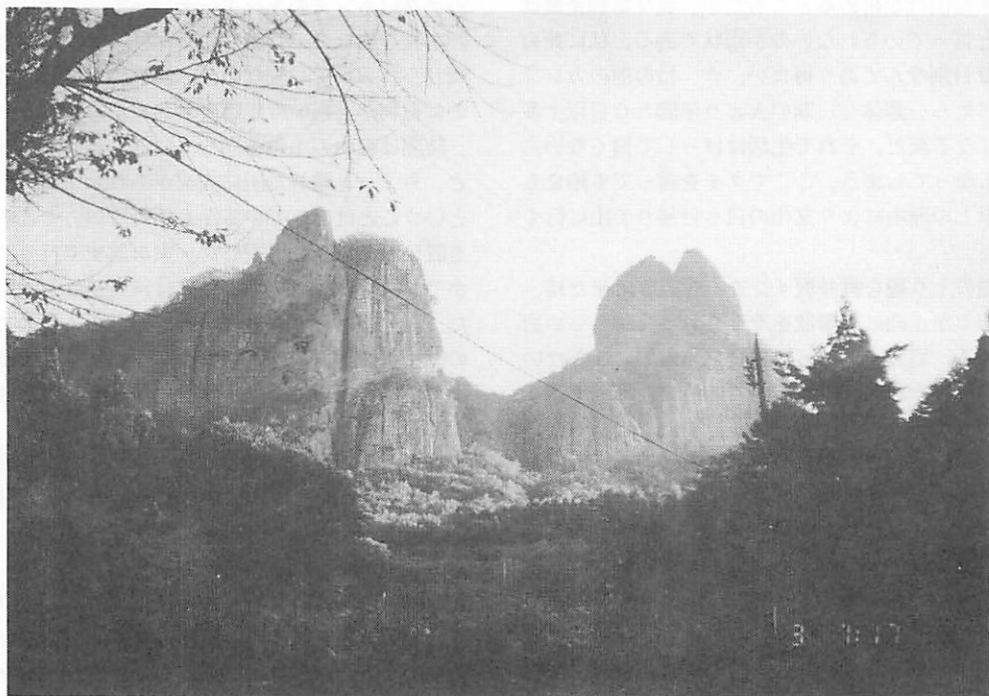
ハイカー『この上はもっと難しいですか』

オバン『いいえ、そんなに難しくないから大丈夫ですよ』

雌岩は難無く通過。稲村山を目指すが途中から道はなくなる。でもそんなことは来る前から分かっていることなので、地図と磁石で行くほかはないのだ。もう一つ、ハンディナビのテストも兼ねている。何回かのテストで、ハンディナビは水平に置かないと正確な位置を示さないことがわかった。従ってこれからのハンディナビは水平計もつけないとだめではないかと思われる。オバンはキノコ採りに夢中でルート探しなどゼンゼンやらない。一度、違う尾根に迷い込んだので、ルート修正のため戻ろうとすると、このまま谷に降りて対岸に見える稲村山に登り返せば良いではないかと主張する。どうしてと尋ねると、真っすぐのが近いし、下に道路が見えるからなのだそうである。やっぱりこの人は素人の域を脱してはいない。

正式の尾根を行くと峠にでた。ここで一休みしてコーヒータムと洒落こむが、先程探ったキノコが臭くてしょうがないので捨てろと命令する。いや、捨てて下さいとお願いする。それはスッポンタケといって毒ではないが、とても食う気にはなれない代物である。このオバンはキノコを見つけると“これ毒？食べられる？”と聞いてくる。毒じゃないと答えると、すべてスーパー袋に突っ込んでしまうのだ。やがて稲村山への登山道に出ることができ、一登りで山頂に着いた。さすがハイキングコースだけあって、数名のハイカーが雑談していた。犬を連れたハイカーもいた。

下りも専らキノコ採りだ。採れたのはクリタケばかりだったが、今晚のおかずになると喜んでた。昨夜の別



高岩

荘でバイクを受け取り入山口に向かう。途中からの高岩の眺めは素晴らしく、カメラを構えている人も数人見かけた。中国の広州ってこんな感じなんだろうか？車を回収し戻るとオバンは途中まで下りてきていた。例の凶々しきで地元のおじさんと意気投合し、食べ物を分けてもらい、それを食べながら下りて来るところなんぞ、このお方はただ者ではないかも知れない。

車(7:47)ー雄岩(8:14)ー雌岩(8:53)ー稲村山(13:05)ーバイクデポ宅(13:50)

(本図 記)

## 谷川岳一の倉沢本谷下部

(出合～本谷バンド)

1998. 11. 7

パーティ L 古山正文、本図一統

本谷の雪が何年かぶりに解けて無くなりその姿を現わした。11月になって寒くなり始め、谷川全体が人気のなくなった頃で、落石の危険も少ないだろうと考え出かけた。指導センターに4人の登山者がいて、彼等も我々と同じ目的だった。出合の駐車場は閑散としていた。数日前山頂には雪が降ったので、防寒対策は十分してきたが羽绒服まで持ってきた本図さんには負けた。衝立前沢付近の徒渉点までは右岸の道を登り、そこで登攀の支度をして遡行開始。ヒョングリの滝下までは水際を登り、1pヒョングリの滝は右から、2p滝上から右壁を登り(支点有り)、3pトラバースしてテールリッジ末端に達した。4pボロボロの右岸を高巻いて、残置ハーケンでビレー。5p緩やかに沢に下つて、左岸に移る。6p大腿開きで再びすぐに右岸に移り、スラブを登る。7p二ノ沢出合い近くの広いスラブ。8p二ノ沢を越えて、滝下。9p水流の右に移り滝を右から越えて、核心部の本谷の幻のゴルジュに達した。ゴルジュ帯の長さは100m位か？入り口からの右岸のバンドを高巻くように見えたが、ゴルジュのどんずまりから登るらしかった。10p最深部の左壁のバンドをつたってハーケン1、フレンズ1をセットして越えた。11p滝を右から越えると滝沢下部がようやく見えた。12pいわゆる本谷スラブの末端中央部。13p、14pと滝沢下部までスタカットで登り終了。本谷バンドには、赤ペンキでR2、R4、R5の文字と矢印でそのルンゼの方向が示してあった。更にはテールリッジ末端までの所々に赤ペンキの印がついていた。テールリッジ上部のスラブにあった固定ロープは取り外されていた。テールリッジで2回懸垂し、50m懸垂部を登りかえし、出合いに戻った。後続の4人パーティは幻の大滝を高巻いている最中であつた。なお、この日この後



本谷下部の幻の大滝

本谷上部で大きな岩崩れがあり、本谷バンドが埋まっていたらしい。

出合(6:54)ー本谷バンド(11:00)ー出合(13:19)

(古山 記)

# 指導員講習会

## (笠松運動公園 編)

1998. 11. 29

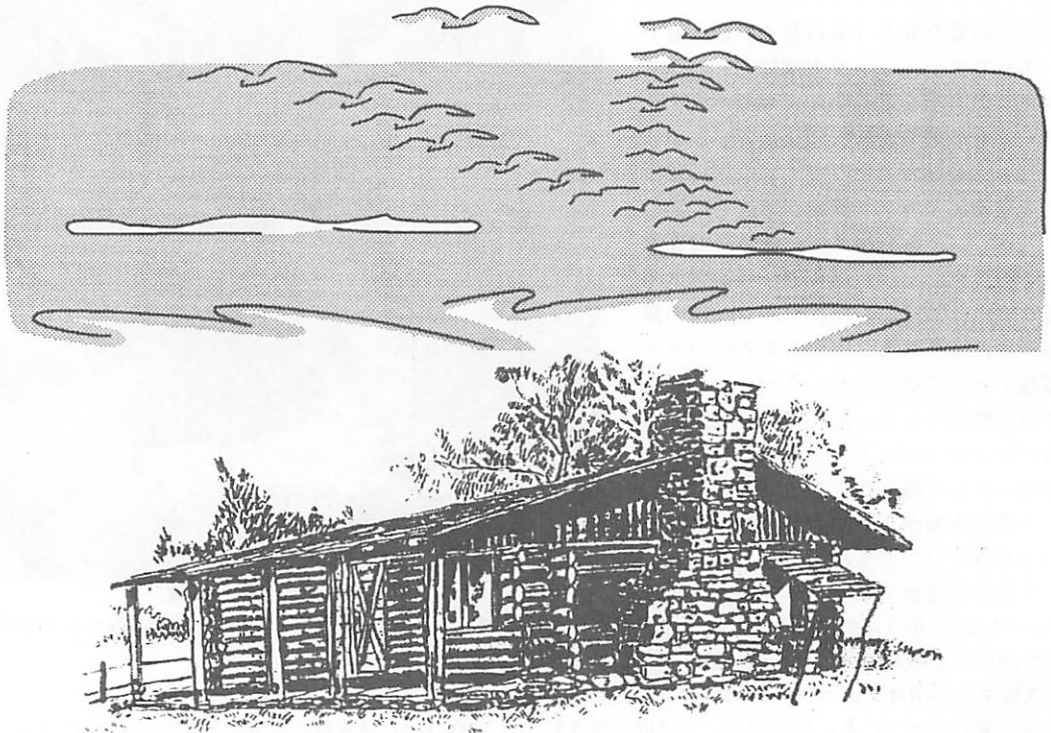
受講者 笹平孝

この講習会は、水戸や日立が会場なので、岩井からだ  
と高速道路代が馬鹿にならない。全部で6回もやるのだ  
から高速費だけでも3万円以上になる。

今回は、笠松運動公園に行った。広いので会場の体育  
館へ行くのもたいへんだった。午前中は屋内で講師の話  
を聞いた。登山の事故例や事故が発生したときに現場や  
組織が行なう全体的な流れ、負傷したときの応急処置、  
ロープの特性や墜落したときの力の計算などかなり専門  
的なこともやった。

午後は人工壁を登れる所まで登ったりカナビラやロー  
プをかける時の注意点や、安全にビレーする方法など。  
それとクライミングについて話を聞いた。

(笹平 記)



# はじめちゃんの思い出日記〈Part 7〉

## 《黒部丸山東壁・緑ルート》

この記録は約20年前にACC-J東京の会報“ナーゲル”No.8に発表した記録をリニューアルしたものです。黒部には丸山東壁・大タテガビン南東壁・奥鐘山西壁の三大岩壁がそびえ立ち、昔からクライマーの注目を集めてきたのは周知の事と思います。20年前にタイムスリップして当時の事を振り返ってみたいと思います。当時のACC-J茨城は少数精鋭主義で6~7人のメンバーしかいませんでしたが、全員が現役バリバリのクライマーで毎週谷川岳に通って腕を磨いていました。この年の2月に八ヶ岳のナメ滝ルンゼで雪崩に遭遇し、春まで活動停止を余儀なくされましたが、夏には大武川を遡行して赤沢奥壁を登攀し、9月には一ノ倉沢衝立岩正面壁を登り、人工登攀に狂っていた時期でもありました。今回のパートナーはACC-J茨城伝説のクライマー江平尚志とACC-J茨城の貴公子中島淳の2名です。江平はエピソードには事欠きませんが、その中で最高のエピソードはヘルメットの替わりにナベを頭に被って一ノ倉沢を登った事でしょう。当時、江平は神奈川県逗子市に住んでいたため海水浴時期に彼のアパートに遊びに行きましたが、1日で飽きてしまい翌日谷川岳に行こうという事になりましたが、ヘルメットが無いと言うので冗談に、『このナベを被ったら』と彼の部屋にあった両手ナベを差し出したら、本当にナベを被って一ノ倉沢衝立岩を登ってしまったのには驚きました。その時の写真がないのが残念です。さて黒部に話を戻しますが、遠くて近い山(安い)黒部の岩壁は我々貧乏クライマーにはありがたい存在です。黒部のトンネルを抜けると山々は秋の色も濃く、黒部の襖は色彩鮮やかに化粧して我々を快く迎えてくれました。黒部川の下流に目を転じると、大タテガビン南東壁に食い込む中央ルンゼの白いスラブが天空に延びており、高鳴る胸の鼓動を感じながら黒部川に第一歩を踏み出していった。かつて冠松次郎翁が遭った頃の急流に思い合わせ、1時間程で内蔵助谷の合に出た。合から30分後には3人で東壁の下で首が痛くなる程岩壁を見上げていました。ここから見上げる丸山東壁は意外と小さく感じられ、今日中に上部に抜けられそうな気がする。今日はこの岩壁は我々だけのものだ。谷川岳のあの喧噪の中で登攀している我々にとって、久しぶりに岩と対話出来る登攀になる予感がします。10時東壁に取り付く。下部岩壁は途中三日月ハングを越すが、単調な人工登攀に終始し7ピッチの登攀で15時に中央バンドに這い上がった。少し早いがここでビバークと決めて中央バンド右端の洞窟(ホテル丸山)に今日のネグラをつくる。ラジオから流れる音楽を聴きながら紅茶を飲み暫く時間を過ごす。山で一番楽しい時間だ。夜中に2~3度目が覚めたが寒さはあまり感じなく快適なホテル丸山だった。

5時起床。手早く朝食を胃袋に流し込み、6時登攀開始。中央バンド左端の垂壁をハーケンとボルトに導かれながら30mで大ハングの下でアプミビレー。いよいよ大ハングの登攀だが左斜上気味に越しているの、張り出しの割には案外簡単に抜けられそう。トップをビレーしながら右手のダイレクトルートを目で追うと、上部の二段ハングが圧倒的な大きさに張り出している。いつの日かあのハングを乗越してみたいものだ。トップはもうハングを回り込み、更に上部を登っている様子だ。30mでテラス着。この大ハングは高度感が素晴らしく、足下から一気に内蔵助谷まで数100m切れ落ちていてゾクゾクするような高度感だ。更に40m登り大テラス着、9時30分。事実上の登攀は終了するので登攀用具をザックに詰め、重くなったザックを背負って急なブッシュ登りでいい加減嫌になった頃、丸山の頂に立つことが出来た。紅葉した木々の間から立山連峰が望まれ気持ちのいいところだが、キジの臭いが鼻につき早々に立ち去る。下降は北面の急なブッシュ帯をブッシュにつかまりながら下降するが、途中何度か踏跡を見失いながら13時ハシゴ谷乗越への登山道に出る。帰路黒四ダムを見物してから再度黒部を訪れる事を胸に秘め、観光客と共に黒部を後にした。



丸山東壁の登攀

1977年10月1日~10月2日  
(木村一、江平尚志、中島淳)

## 鳳凰三山縦走

1998. 11. 22~23

パーティ L本図一統、古山正文、笹平孝、生井一男

初めの予定では、私と本図さんの2人で行く事になっていた山行であったが、いきなり古山・笹平の極悪？コンビが乱入してきた。この二人の迫力に勝てる訳もなく4人で行く事になった。

我々はいつも車で入山なので入山口を何処にするか迷ったが、青木鉱泉から入り薬師岳から青木鉱泉へ戻るルートがあるのでそれを使って車まで戻ろうという計画で、青木鉱泉に車を停めた。

翌朝、8時過ぎに出発。登攀する訳でも無いのでゆっくりとしたスタートだ。他の中高年の登山者らしい人たちに交じってのんびりと行く。縦走なので気分も楽であるが、一応オベリスクでも登ってみようという寸した登攀装備はザックに入っている。が、いつもよりザックは軽い気がする。ドンドコ沢の河原を暫く歩き、南精進ノ滝を過ぎた辺りから急登が続く登りとなった。久しぶりに汗をかく登りだ。一服しながらゆっくりと登る。谷から吹いてくる風が心地よく感じる。このルートは南精進ノ滝、鳳凰ノ滝、白糸ノ滝、五色ノ滝と奇麗な滝が見れる登山道であった。

もう少しで鳳凰小屋に到着かなという辺りから降りだした小雨が雪に変わってきた。その雪の中、鳳凰小屋に到着した。鳳凰小屋には3~4パーティのテントが幕営してあった。鳳凰小屋到着13時45分。

鳳凰小屋の幕営地は雪で覆われていた。まあ、今回の降りだけでは無く以前の積雪もあると思うが……。

まずはテントを設営。各自、雪を払いテントに入り一息する。適度な疲れがテントの中で落ち着いたころ心地よさに変わってくる。山をやっているこのひと時が一番安らぐひと時だ。このひと時を味わいたくて山をやっている気がする。回りのテントからは夕飯の支度の雰囲気漂う。我々も夕飯を作り始めた。美味しく出来た夕飯を食べ、アルコールを一杯やりながらまどろみ山友と語らう。ほかの遊び趣味には無い、寝食を共にするスポーツ、今まで辛い登りも、きわどい登攀もテントに帰ってきてからこれがあるからやってこれたのだらう。

隣のテントは学生のパーティのように暫くすると小屋の方へ移動したのか？、小屋からは何人もの歌声が聞こえてきた。青春しているなぁとその歌声を聞きながらシュラフに潜り込んだ。

次の日は、鳳凰小屋を7時半過ぎに出発し、地蔵岳を目指す。その前にオベリスクの登攀をしようとオベリスクの基部まで行くが、登攀するのに時間がかかりそうな事と下降ルートの青木鉱泉への下降路が使えず、夜叉神峠へ下ると考えると時間的に無理になるので今回は諦めて地蔵岳へ向かった。頂上で記念写真を撮



オベリスクをバックに

て、次のピーク観音岳までのなだらかな稜線に行く。薬師岳までのなだらかな稜線歩きだが風が強く飛ばされそうになった。天気はよく富士山、北岳、間の岳、農鳥岳が奇麗に見えた。景色に見とれながら稜線を飛ばされないように行くと薬師岳に到着した。

頂上よりちょっと下った岩の所に青木鉱泉へのルートが赤のペンキで書いてあったが、下の薬師小屋で聞いてから考えようと決まって小屋まで下っていく。薬師小屋に到着後、早速笹平に青木鉱泉への下降路はどうか？また夜叉神峠まではどのくらいかかるか？そして青木鉱泉へ帰るためにタクシーを呼ばなくてはならないので下の小屋に電話はあるか、小屋はいつ迄開いているか時間を聞いて来てもらったが、開いている時間はいつ迄に分からなかった。本図さん等は『時間的に夜叉神峠に下って小屋が開いている時間に下れるか？小屋が開いてなければ、最悪は芦安まで歩かなくてはいけないし、歩いて行って芦安からのタクシーがあればいけどなあ』と話していた。とにかく下ってみようとな夜叉神峠に下ることにした。

樹林の中の下降路を雪を踏み締めながら行くが、アイゼンが重く感じてきたし下降路もなだらかになってきたのでアイゼンを外し快適に下降する。天気も良く南御室小屋まであっという間に下りてしまった。ここでもう一度下の登山口の小屋の事や、タクシーの事を確認するがよく分からなかった。ここで行動食を食べ

一休みしてから、笹平を経て杖立峠を越え夜叉神峠に着いた。ここにある夜叉神峠小屋でまた一休み。ここまで来れば下の登山口の小屋が開いているうちに下れるので（たぶん？）楽勝だ。その後、足取りも軽く下降を続け夜叉神峠登山口まで降り、小屋の電話で芦安からタクシーを呼び、無事青木鉱泉まで戻り、茨城へと帰途についた。

11月22日

青木鉱泉(8:23)－鳳凰小屋(13:46)

11月23日

鳳凰小屋(7:41)－地蔵岳(9:34)－観音岳(10:41)－夜叉神バス停(15:33)

(生井 記)

## 日原周遊（カモシカ山行）

1998. 11. 29

パーティ L 古山正文、本図一統

青梅までは高速道路を使った。大ダワ林道の唐松谷出合で本図さんの小型バイク（モンキー）をデポし、その後小川谷林道終点まで移動した。

翌朝、林道終点から西谷山に登った。西谷山下には再建されたばかりの新しい避難小屋があった。登山者が2名泊まっていた。この上からは稜線歩きとなった。右手には秩父の町並が良く見えた。西谷山、アララギ山、長松山、芋の木ドッケを越えて大ダワ林道へのコルへ下った。ここからは雲取山荘を通過して雲取山への登りだ。山頂には多くの登山者がいた。ここでコーヒを沸かし昼食を取った。南アルプスの方から風に乗ってチラチラと雪が舞っていた。期待してた東京の町は見る事が出来なかった。小雲取山から稜線を離れ唐松谷の出合へ登山道を下った。大ダワ林道から本図さんは車を取りにバイクで下っていった。私はテクテクと歩いて下った。日原の鍾乳洞の前で戻ってきた本図車と出会った。

車(6:55)－西谷小屋(8:16)－西谷山(8:29)－芋の木ドッケ(11:27)－雲取山(12:45~13:12)－オートバイデポ地(14:54)

(古山 記)

# 34年の歴史・過去と現在



1964年11月23日…雲取山荘 《パート1》…人物は本図

(古山氏と子氏) 飯岡照日



1998年11月29日…雲取山荘 《パート1》…人物は古山



1964年11月23日…雲取山頂にて 《パート2》…人物は本図



1998年11月29日…雲取山頂にて《パート2》…人物は古山

# 大菩薩・石丸峠～笹子峠（カモシカ山行）

1998. 12. 6

パーティ L 古山正文、本図一統

先週に続いてカモシカ山行を行うことにした。5 cm 程の新雪がある笹子峠にバイクをデポし、小屋平に向かう。途中、橋の上で車が横滑りを2回ほどした。なぜか車を降りてみてわかった。昼間降った雪が凍りつき道路はツルツルだったのだ。見た限りでは凍結しているようには見えなかったのだが。高度が上がってくると道はアイスバーンとなり、歩こうにも四つん這いでないと立ってられない状態になった。こういうこともあろうとスタットレスタイヤを履いてきてよかった。四駆にして慎重に行く。小屋平に来るのは3度目だが昔の面影はない、というか30年以上経つので記憶にないと言った方がよい。今回のコースの夏の標準コースタイムは約11時間であるが、これを8時間で歩こうとするものである。

起きぬけの朝飯は殆ど喉を通らず、トイレ等準備を済ませすぐ出発する。先週の雲取の余勢をかってグングン飛ばして石丸峠で小休止。

石丸峠＝18歳の冬単独で来た際、そのとき知り合った同じ歳の青年（渋谷の中村屋で働いていた。名前は忘れた）と岩登りを始めようを約束したが、結局その青年とは一度も山に行かず離ればなれになってしまった。あゝ、あの青年（今は中年のはず）ともう一度会いたいものだ。

石丸峠から先はトレールなくスネまでのラッセルとなる。クマザサの上に新雪が積もり道形を探しながら進む。ふと東を眺めれば東京副都心のビル群が見える。そのほか池袋のサンシャイン60から横浜のランドタワーまではっきりと確認できた。新雪+クマザサのラッセルでピッチが上がらない。今日もヘッデンでの歩きを覚悟する。小金沢山～牛奥ノ雁ガ腹摺山～川胡桃沢ノ頭を過ぎ黒岳に着いた。

黒岳＝昨年、高木や坂本らと赤岩沢から来たばかりで、夏は人が多い。山頂からの眺めはあまり良くない。

黒岳からは道も良くなりトレールもあってピッチが上がる。3人の写真家らしきパーティを追い抜き、湯ノ沢峠に着いた。湯ノ沢峠は大和村側と大月側からの林道が伸びてきており、間もなく繋がるので、これからは車で越せる峠になってしまう。この付近は交通の便が良いせいか数パーティのハイカーと行き会った。中にはタウンシューズの人もいた。おそらく林道を車で来たのだろう。古山はゴアテックスの軽登山靴で快適そうだが、私は短靴で雪が中に入り、冷たくなってきて不愉快この上ない。

山梨100名山の看板がある大蔵高丸の登りは雪が踏み固められて滑りやすい。ハマイバ丸ではどこから登って来たのか2人の女性が弁当を食べていた。普段



曲り沢峠にて

の私なら“おいしそう、俺も食べたいなあ”などと声をかけるところだが、今日はそんな時間の余裕はない。無言のまま通り過ぎた。ところで、山の名前に使われている丸であるが、丹沢などではよく耳にする名前である。円頂つまりドームの意味であろう。

大谷ヶ丸の下りから見る最後のピーク（笹子雁が腹摺山）は遥か彼方である。コンドウ丸を越すと曲り沢峠はすぐだった。小休止。言葉通り10分と休まない。

なるほど、丸を使う訳がわかった。丸をドームといったらコンドウ丸はいったいなんて言えばいいんだ。あまり大きな声では言いにくい名前になってしまうのではないか。

今日縦走してきた尾根を通称「小金沢連嶺」という。この尾根の南方、主稜線からちょっと東に外れた所に滝子山という山がある。私は以前からこの山は気になる山の一つであった。なぜかという、この山にはP1～P4という名前のピークを持った尾根がある。Pと付くからには岩峰なのではないかと思っていたのだが、ここから眺めた山容で、はかなくその期待は消え失せた。と同時に私の頭の中にある「気になる山リスト」からこの山名がなくなった。

大鹿山から大鹿峠、その後のお坊山の登りは疲れた足には少々堪えた。この付近の積雪量は山の高低に比例して増減するようで、足首程度とだいぶ少なくなった。米沢山では4人組のハイカーに会ったが我々とは逆コースである。人のことは言えないが、この時間では明るいうちに降りられるのだろうか（この後笹子駅で、このパーティも無事下山したのを古山が確認した）。小ピークを2つ越し、最後の一登りで笹子雁が腹摺山に着いた。これで私は雁が腹摺山、牛奥ノ雁が腹摺

山、笹子雁が腹摺山の3つ共登ったことになる。だからといって別にどうということはないが。なんとか明るいうちに降りられる見通しがついたので、今日初めての休憩らしい休憩を取り、コンロを使ってコーヒータイムにした。山頂は見晴らしがよく、今日歩いて来た大菩薩方面はすでに雲の中、先程の米沢山までもが雲に隠れようとしており、天気は下り坂であることが予想できる。笹子峠にはヘッデンを使わず到着できた。休憩込み所要時間は9時間20分だった。

私はバイクで小屋平まで車回収に、古山はヘッデン歩きで笹子駅までと、ここで別れた。凍結した道路をバイクで走るのは初めての経験で、岩登り以上緊張した。

小屋平(6:38)－石丸峠(7:21)－湯の沢峠(10:34)－曲がり沢峠(12:51)－笹子雁が腹摺山(15:00)－笹子トンネル(15:59)

最後にやってしまったドジなお話し＝車を回収してその帰り道、日川林道から20号線に出たら、新笹子トンネルを通れば10分もかからずに笹子駅に行けるのに、私は長い時間をかけ甲州街道から笹子トンネルを通過して笹子駅に向かったのでありました。古山と合流後、二人の会話がかみ合わず、チンプンカンプン。そのうち古山が「あれ、本図さん、もしかして旧道通ってきたんですか」と言い出した。つまりそういう訳。知らないということはこういう事である。

(本図 記)

## 仙ノ倉山北尾根

1998. 12. 13

パーティ L 古山正文、本図一統、笹平孝

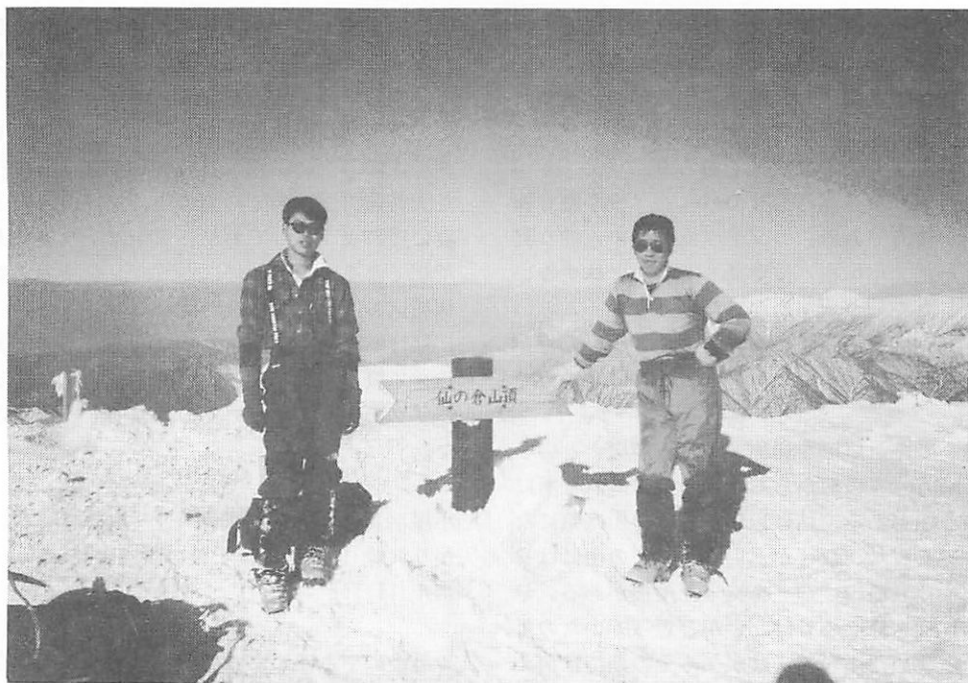
土樽駅に登山届けを出して、林道を行ける所まで行って、仙ノ倉山荘の手前にある小さな橋の所まで車で行くことが出来た。

翌日は、天気が良かった。雪が少ないのが少し残念だった。駐車場を出発するとすぐに出合の吊り橋まで来れた。吊り橋は夏の大雨で半分は流されていて、手前の部分しか残っていなかった。手前の部分もワイヤーが垂れていて、まともに渡ることが出来ない状態だった。毛渡沢を20分ほど歩いた所から尾根に取り付いた。辺り一面ヤブだらけの急登が暫くのあいだ続くと仙ノ倉北尾根に合流した。ここからは登りやすい尾根になった。シッケイの頭附近で上から降りてきた浦和浪漫の人達と会った。この場所がこのルートで一番急

斜面の所だった。次第に尾根が広がって平らなところになった。更に進むと仙ノ倉山直下の急登となった。ヤブの急登に体力を使い過ぎたのでバテバテになってしまった。仙ノ倉山頂は尾根の分岐点になっていて標高も高いので眺めも良かった。廻りのスキー場は雪がほとんど無くて芝が見えていた。頂上でコーヒーを沸かして飲んでから仙ノ倉北尾根を降りた。

駐車場(7:30)－シッケイの頭(12:50)－仙ノ倉山(14:05～14:25)－駐車場(17:10)

(笹平 記)



仙ノ倉山頂にて

## ハヶ岳広河原三ルンゼ

1998. 12. 20

パーティ L 本図一統、古山正文

ハヶ岳の麓の別荘地から広河原への林道に入り、工事通行止めの所まで入った。大阪や名古屋ナンバーの車が駐車していて、遠くから来て御苦労な事だと思った。最も、彼等からみれば我々もそうなのかもしれない。うっすらと雪の積もった林道の終点の金属性堰堤前から左岸の踏み跡に沿ってゆく。広河原の左俣の分岐で迷った。右の沢沿いに進んで右俣の分岐で登攀準備する。本谷に進んで最初の大きな滝は見るからに氷が薄い。それでも右側から登れるのではないかと取付いてみた。

一段登りスクリーハーケンを打ってランナーを作り、その上にピッケルを打ち込んだ途端、大きく氷が割れ水流が丸見えとなったので止めた。左壁を高巻いた。緩やかな滝を幾つか越えていくと、正面に大きな氷が現れた。これは本谷ではなく、左から入る5m位の狭い滝が本谷であった。これを越えると滝以外はラッセル状態となった。二ルンゼと三ルンゼの分岐で少し休憩した。今日はだいぶ疲れた。三段の滝は2本アイススクリーを打って、越えた。雪のルンゼをつめると、最後の4m位の滝が出現。氷の発達が悪く下までは氷が達していない。1m位岩壁を登りバンドに立ち、左壁の岩登りで越えようとするが意外に悪い。本図さんはやっぱり氷を登るんじゃない？と言うんだけど氷は薄く打ち込めないし蹴りこめない。しかも立っ

ている所から氷はだいぶ右奥にあるので簡単に移ってはいけない。覚悟を決めてわずかな氷の凹状部分を頼りにピツケルアイゼンを利かせて登った。この後は5pルンゼをつめて、阿弥陀岳南稜にて、2pで阿弥陀の山頂に着いた。道具を仕舞い御小屋尾根を氷用アイゼンの歯が減らないように慎重に下る。御柱山への登り返しのコルで左俣に下る赤布があり、それを頼りに広河原左俣に下った。20分位で沢床に下れた。その位置は朝迷った左俣分岐付近だった。あとは朝来た道に戻った。

車(7:47)ー右俣出合(9:24)ー阿弥陀岳頂上(14:07~14:23)ー車(16:32)

(古山 記)

## エビス尾根（仮称）偵察

1998. 12. 23

パーティ L 本図一統、菊地光夫

先日、仙ノ倉北尾根に行った時2万5千図（三国峠）を見ていて、エビス大黒の頭から南に伸びている急峻な尾根があることに気がついた。それは尾根の支稜ではなく、小さいながら国境稜線のピークに直接突き上げていく立派な尾根である。ン？この尾根はなんという名前の尾根だろう。家に帰ってから記録探しが始まった。結果は次の様なこと位しか分からなかった。

岩と雪35号、地域別登高記録抄によると、1957年山と溪谷社発行の「谷川岳とその周辺」にはエビス新道として、1959年山と溪谷社発行の「谷川岳」には川古新道として紹介されている。ということは、この尾根には以前道があったのである。また、明治の末頃までエビス大黒の頭南腹には銅山があったらしい。従ってこの道は鉱山道であった可能性も高い。その後銅山は廃鉱となり、猟師がたまに使うくらいで次第に利用されなくなっていったと考えられる。手持ちの資料をしらみつぶしに探した訳ではないが、この尾根を冬に登ったという記録も見当たらなかった。

こんな時は、この辺りにはめっぽう詳しい高桑氏に聞くのが一番とメールを入れた。帰ってきた返事は、『それは最近手入れされて歩きやすくなった道で……とととと、それは越路か……、私にもわからないなあ。それは面白そうだな、もし行くんだったらいつでも付き合うよ』というものだった。よし、そんな時の神頼みは、歩く山の百科事典と私が勝手に名前をつけた河村氏しかないない。早速電話を入れてみる。

河村氏『昔そこに道があったという話は聞いています。最近登られているかどうかは知りません。ただ、廃鉱になってからも猟師達が四季を通じ使っていたと考えるべきでしょうから、記録がないからといって冬期末踏は考えにくいでしょうね。西黒尾根を冬登っても記録を出す人はいないように。でも狙い目としては面白いと思います』

同感であった。蛇足だが、こういう未踏とか未登とかの可能性のあるルートを見つけたら、相談する場合には人を選ばなければいけない。なぜならば相談した相手、もしくはその仲間によって先に登られてしまうことが、ままあるからである。私にも経験があるので心しておいた方が良いでしょう。

この尾根をこの目で確かめたくなってきた。菊地に話してみると、23日は忘年会があるので早く帰れば付き合っても良いということだった。今回は幕営地が見つかればそれで良いと考え行ってみることにした。

計画書を書く段階で尾根名を何と書こうか迷った。エ

ビス大黒の頭南尾根、エビス大黒の頭南稜、金山沢左岸尾根、川古尾根等いろいろ浮かんだが、一番格好いいエビス尾根（仮称）を選んだ。

23日早朝、ゲートを開けて林道を車で行く。荒れていた林道は改修が進んで、10月の時より少し奥の林道崩落地点まで入れた。仮眠をとりゆっくり出発する。

赤谷川本流を徒渉して尾根の末端に取り付くつもりだ。徒渉は飛び石伝いに足を濡らさず行けた。すると取付の灌木にタオルが結び付けられており、踏跡がはっきりと付いているではないか。『なんだ、登られてんじゃねえか』と独り言を言いながら3mほど登ってみると、微かな踏跡が金山沢の上流に向かっていただけだった。

尾根を忠実に辿ることにした。この辺の積雪は5cmぐらい。踏み跡や赤布などはぜんぜんない。高差にして60mも登ったろうか、ちょっとしたコブにでた。赤谷本谷側は垂直に切れ落ちて高度感がある。ここには古い踏跡と思われる形跡があった。また少し上には古い鉋目も発見できた。尾根通しにヤブとちょっとした露岩を登ると1031mピークに出た。この登りは見た目よりも長く感じた。

尾根上のヤブはそんなに濃くはなく、赤谷川本谷方面の見通しはよくきいた。尾根はこのピークで90度右に曲がり緩やかに高度を下げる。夕方までに茨城に帰ることを考えると今日はここまでだろう。アタックの際のベースとしても良い位置である。ここは積雪20cmといったところ。尾根は細く形状からいって東側に雪庇ができるであろうことは予想がついた。用意してきたノコギリ等でヤブを切り開き、2ヶ所の幕営地を作った。

帰路、林道から眺めるエビス尾根は、最上部は雲で見えなかったものの、急峻に立ち上がり素晴らしい尾根にみえた。

また林道には10月に来たときから放置されているバイクがあり、ナンバーが付いたままになっていることから盗難車と考え、ナンバーを控え沼田警察署に通報した。

湯宿温泉では時間が早いので入れないと思ったが、菊地先生の顔で浴場の鍵を開けてもらった。イワナの釣果は釣人の顔の良し悪しに比例する、というのは深瀬さんの持論だが、温泉の鍵を開けてもらえるかどうか顔に比例するのかもしれないね菊地さん。

（本図 記）

追伸＝エビス尾根（仮称）の冬期トレースは1月下旬成功した。詳細は次号にて。

# 鍋足山

1998. 12. 27

パーティ 1本図一統、他1名

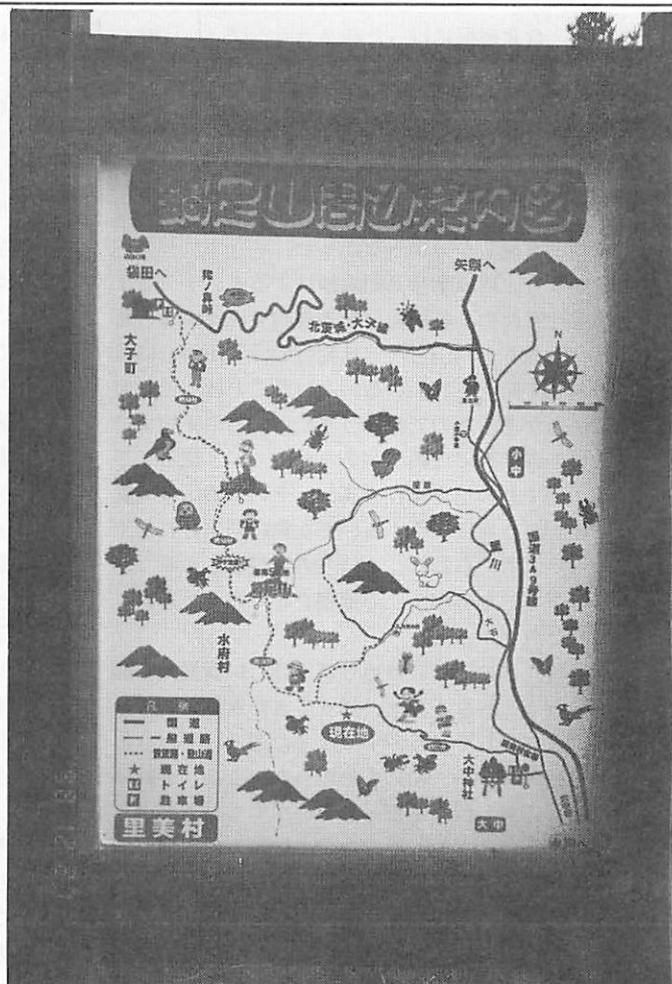
鍋足山とは奥久慈の方にある山で、昔の鍋は底に3つの足が出ていたが、その鍋を引っ繰り返した形に似ているというところからこの名前がついたそうである。3つの峰は岩峰だそうである。なんでも、昔はバリエーションルートもあったそうな。よし、このバリエーションルートとやらを見てみよう、あわよくば登ってしまえと行くことにした。

合宿を目前にしたこの日にパートナーがいるはずもなく、先日、高岩に行ったオバンを誘うことにした。二つ返事でいきますという言葉が返ってきた。このオバンは勿論女性であるが、女性という感じがしないところが気楽でよい。でも山行に同行するのは、他にパートナーがいなくてただで勘弁してもらいたい。私はこのところ何時もパートナー不足気味なので、貴重な存在といえはその通りで、それはそれで良きパートナーなのかも知れない。ザイルと少々登攀用具を持っていくことにした。

早朝出発し2時間余りで里美村役場に着く。山頂に向かう道はキノコもなく、オバンのご機嫌もイマイチの様だ。頂上付近は確かに岩混じりの峰ではあるが、私の頭の中にある岩峰の定義とはちょっと違う。岩壁もあることはあるが、男体山と同じ凝灰岩？で、岩登り対象にはならない。足を滑らせたらただでは帰れそうもない足場の悪い所もあるが、バリエーションルートになるという沢は何処だか見当もつかなかった。同行のオバンにはそんなことはどうでも良く、キノコ、キノコと目を皿のようにしている。今こころ出ているキノコなんて、この辺にはないと思うんだけど俺は。キノコ汁をご相伴にあずかったことのある私としても“いいかげんにせんかい”ときつく言えない弱みもあるのだ。

最後のピーク(552m峰)でコーヒータイムにしたが、このオバンはコーヒーにはちとうるさい。安物のインスタントコーヒーなど入れたら”こんなの飲めない”なんて言われてしまう。うるせえババアだなど心の中で思っても『贅言言わないで下さい、俺は喫茶店のマスターじゃないんだから』と優しく反論する。このピークは眺めが良くて高度も高くないので、下に見える集落は箱庭を見ているようでとてもきれいだ。

小中宿という集落に下りてバスで役場まで戻ろうと



鍋足山登山口にあった道標

するが、1時間以上待たねばならず歩くことにした。バスの運ちゃんは美味しそうに弁当を食べていた。車と違って歩くといろいろな物が見えてくる。小川には小さな魚がたくさん泳いでいるし、一本の木からでている葉っぱが場所によって形が違っていたり、古い造り酒屋があった。この造り酒屋の漆喰の塀は墨で黒く塗ってあった。私には何故だか分からなかったが、オバンが、これは戦時中、敵の飛行機から目立たないように塗ったんだと教えてくれた。成程ね、歳は伊達にとってんじゃねーわな。

オバンは最近、所属山岳会の山行に時々行っているそうで、登山靴といい、ザックといい、おニューである。それにひきかえ同行の青年(私のことですが)はヨレヨレのザックと運動靴だ。なんとアンバランスなパーティであるが、これもインスタントパーティだから

ら仕方あるまい。

過日その会のチーフリーダーから

『当会でも沢登りを始めようという気運が高まってきたが、経験者がいないので、来年講師としてお願いしたい』と、正式に依頼してきた。某会は、うちと違って会員も多いし財政も豊かなようだ。俺も最近懐が寒いし、いいアルバイトになりそうだ。

『ウ〜ン、俺もかなり忙しいんだけどよ〜、君の依頼じゃなんとか時間を作るほかないかな〜。まあ、お礼はあまり気を使わんで……』

と、恩着せがましく勿体ぶって言いかけたら

『はい、ありがとうございます。うちも財政が逼迫しているので、日当は缶ビール1本でご勘弁下さい。さらに本図さんの弁当代も交通費も払う余裕がないんですよ、すみませんね』だと。オイオイ、いくらなんでも缶ビール1本はないだろ。1ケースの間違いじゃないのか。プロを頼めば、ン万円はかかるというのに。弁当代や交通費だってそうだ。少ない休日を潰して、自分と関係のな

い他のクラブの講習会の講師をやって、何で俺が自腹を切らなければならないんだ。オバンも図々しいけど、それ以上に某会は図々しい。“や〜めた”と言いたかったけど、心の中を見透かされそうなので

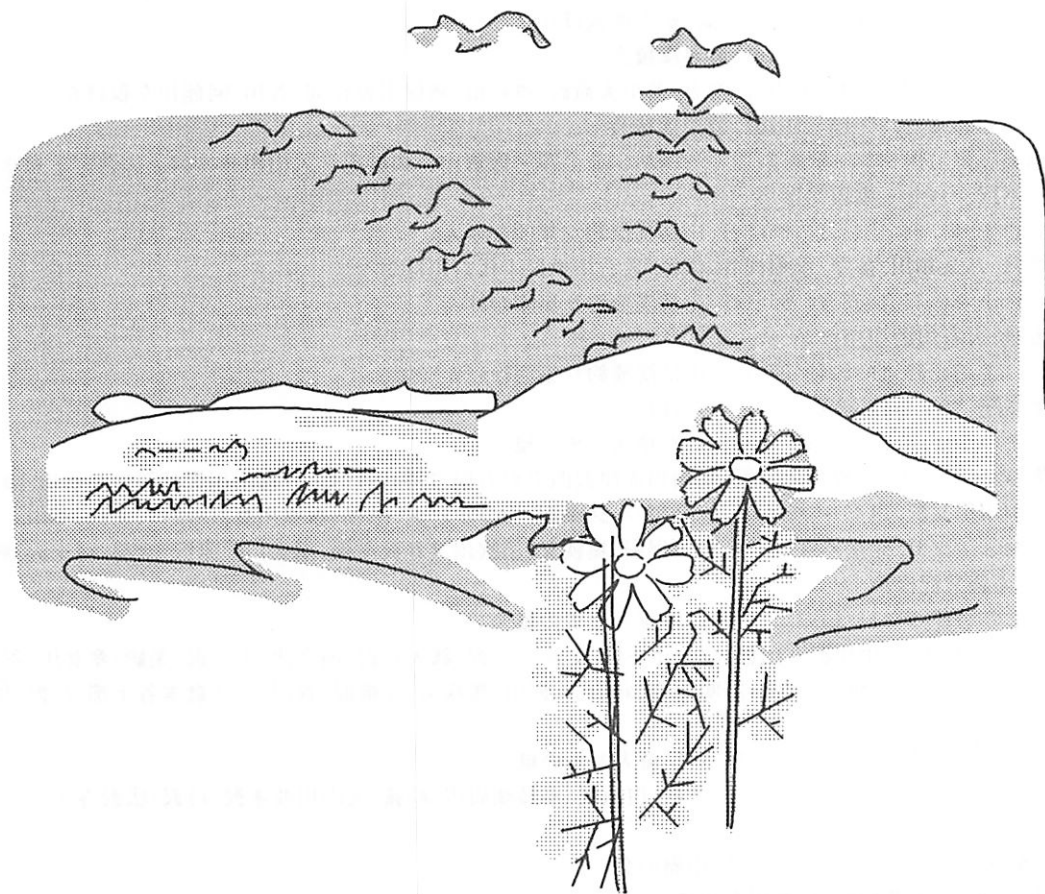
『でも、やっぱり忙しいから難しいかも知んねえ。クラブの行事もあるし、登りたい所もあるしな。もし時間が取れたらな〜』

と、返事を濁しておいたんだけど、沢登り普及の為にはこのくらいの我慢はすべきなのだろうか、皆さん教えて下さい。

会員の皆様をお願いだが、この会報はオバンには絶対見せないでほしい。

里美村役場(8:50)ー鍋足山(9:46)ー552mピーク(10:48~11:19)ー里美村役場(13:03)

(本図 記)



# 《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

## 月報

◎Rohman NO. 162, 1998, 10 B5 46P 浦和浪漫山岳会

秋の集中・渡沢～枯木山、鱒沢川黒沢～枯木山、白滝沢～枯木山、アサズマ沢～枯木山、谷川・オジカ沢、南会津・荒海川本流赤倉沢、白山瀬波川、黒部源流・祖父谷赤木沢、会津駒ヶ岳ほか

◎Rohman NO. 163, 1998, 11 B5 24P 浦和浪漫山岳会

三本槍岳、南会津・栗生沢～黒滝股山～隔田沢、丹沢・広沢寺の岩場、越後・守門岳上黒姫沢、雪上訓練・谷川岳ほか

◎Rohman NO. 164, 1998, 12 B5 42P 浦和浪漫山岳会

岩手夏油温泉〇B山行、那須・番屋川右俣～形部沢左俣～右俣～三倉山、阿武隈川白水沢左俣左沢ほか

◎わらじ NO. 511 1998, 10 B5 12P わらじの仲間

なぜ私たちは剣沢を登ったか、会津・白戸川メルガ股沢、氷ノ山・八木川左俣ほか

◎わらじ NO. 512 1998, 11 B5 18P わらじの仲間

秋の集中・三国川栃ノ木川金掛沢、丹後沢、本谷、奥利根・越後沢中俣、下田・加茂川小俣沢、飯豊・長走川大面沢鈴ヶ滝沢、内ノ倉川石ミキ沢要平沢、伊蔵沢、玉川松山沢本流ほか

◎わらじ NO. 513 1998, 12 B5 10P わらじの仲間

屋久島・安房川北沢右俣、南会津・檜枝岐川硫黄沢ほか

◎逍遙 NO. 89 1998, 10 B5 20P 逍遙溪稜会

中ア・大田切川本谷、谷川・毛度沢シッケイ沢右俣左沢、奥利根・湯松曾川東黒沢、奥秩父・笛吹川東沢鶏冠沢右俣、朝日・荒川大玉沢、栗駒・麝香熊沢ほか

◎逍遙 NO. 90 1998, 11 B5 16P 逍遙溪稜会

毛猛・太郎助沢、丹沢・小川谷、吾妻・前川大滝沢、奥利根・檜俣川後深沢、谷川・阿能川左俣ほか

◎逍遙 NO. 91 1998, 12 B5 20P 逍遙溪稜会

南ア・野呂川シレイ沢、飯豊・三国岳、北会津・飯森山、裏妙義・入山川並木沢、大菩薩・泉水谷ノミバ沢、八ツ・権現岳ほか

◎Next! No. 34 1998, 10 B5 32P 山岳渓流釣り集団むげん

朝日・八久和川、多摩・水根沢谷、飯豊・大石川東俣千代吉川ほか

◎Next! No. 35 1998, 11 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん

飯豊・大石川西俣川ほか

◎Next! No. 36 1998, 12 B5 24P 山岳渓流釣り集団むげん

奥多摩・つずら岩、飯豊きのご採りほか

◎とまのかぜ No. 71 1998, 10 B5 65P 童人との風

飯豊・イシミキ沢、松の木穴沢、加治川赤津沢西の沢右俣、日和田RCT、富士川黒桂河内加治川、越後・三国川黒又沢、日高・ベテガリ岳、会越・小久蔵沢～もうかけ沢、越後・水無川真沢～蔵川、北沢、谷川・一ノ倉沢3ルンゼ、北岳バットレス第4尾根、奥秩父・笛吹川ヌク沢左俣、摺上川叶堂沢、会越・霧来沢、鞍掛沢、大鍋又沢ほか

◎とまのかぜ No. 72 1998, 11 B5 43P 童人との風

谷川・白毛門沢、東黒沢丸山沢、ウツボギ沢、ナルミズ沢、銭入れ沢、南会津・下ノ沢、栗駒・産女川、谷川・一ノ倉2ノ沢、会津・三岩岳～慈明山～家向山～沢山、奥秩父・豆焼沢、谷川・一ノ倉本谷下部、丹沢・早戸川原小屋沢ほか

◎とまのかぜ No. 73 1998, 12 B5 23P 童人との風

黒部・別山大へつり中央ルンゼ、帝釈・白滝沢、羽鳥湖周辺、妙義・入山川並木沢、丹沢・広沢寺ゲレンデ、勘七の沢ほか

◎山紫水明 No. 1998, 10 B5 14P 山旅の会

穂高・滝谷、大菩薩峠、皆瀬川春川ほか

◎山紫水明 No. 1998, 11 B5 4P 山旅の会

谷川・マチガ沢東南稜、北岳バットレス第四尾根ほか

◎山紫水明 No. 1998. 12 B5 10P 山旅の会

袈裟丸山、きのご採りほか

◎すずらん通信 NO. 211 1998. 10 B5 36P 鈴蘭山の会

南会津・黒檜沢〜ミチギノ沢〜御神楽沢、白山・ト谷〜笈ヶ岳〜清水沢、奥鬼怒・小湯沢、和賀・堀内沢〜八滝沢〜龍又ノ沢〜部名垂沢、守門・西川本高地沢、湯松曾川・大倉沢、越後・三国川銅倉沢、平ガ岳・恋の岐川、丹波川・火打石谷、谷川・鷹巣C沢、魚野川、渋沢ほか

◎すずらん通信 NO. 212 1998. 11 B5 18P 鈴蘭山の会

越後・水無川北沢、真沢、鹿島槍ヶ岳ほか

◎すずらん通信 NO. 213 1998. 12 B5 8P 鈴蘭山の会

丹沢・鳥屋待沢右俣、足尾・柳沢川左俣〜ス沢〜三俣沢宿堂沢〜ネギト沢、虎毛山塊、栗子・手沢〜ヒツ森〜枯松沢、叶堂沢、安達太良・杉田川ほか

◎溪游 NO. 103 1998. 10 B5 12P 溯行同人溪游会

大峰・下多古川、南ア・大井川信濃俣河内谷、台高・蓮溪谷、扇ノ山・来見野川ほか

◎溪游 NO. 104 1998. 11 B5 16P 溯行同人溪游会

大峰・東ノ川、丹波・由良川ゲロク谷左俣、播州笠形山・根宇川滝ノ谷、中ア・木曾駒正沢川細尾沢、屋久島・宮之浦岳、大峰・わさび谷小舎、観谷、地獄谷、北ア・金木戸川打込谷、南ア・尾白川黄蓮谷右俣ほか

---

## 会報

◎年報わらじ NO. 21 1998. 12 B5 304P わらじの仲間

1996年12月1日から1997年11月30日までの記録。夏合宿・飯豊連峰の沢6本、冬合宿・飯豊連峰の尾根3本。秋の集中・飯豊連峰の沢6本。春の集中・日光の沢3本。サブ合宿・大源太山6本。その他の会山行4本。沢登り・北海道／東北の沢として8本。会津／南会津／会越の沢として7本。下田／川内／越後／奥利根の沢として3本。信越／上越の沢として5本。北関東の沢として2本。東京近郊の沢として2本。アルプスの沢として3本。雪稜／雪壁として19本。岩登りとして3本。山スキーとして11本。縦走（積雪期）として20本。縦走（無雪期）として7本。アイスクライミングとして2本。海外遠征はムスターグアタ峰ほか

◎アンデスの青い空 B5 クラブ デ シエスタ デ アンデス

チリーアンデスのツブンガトに6名でアタックするも登頂ならずの報告書

以上閲覧したい方は本図まで

## 編集後記

グレートジャーニーと云うものを知っていますか？。人類発祥の地アフリカ大陸から人類がユーラシア大陸を東に、そして北米、南米と人類が繁殖の地を広げていった数百万年の経緯を自分の足で逆に南米の先端から北米を越えベーリング海峡を渡り、ユーラシア大陸を西へ、そして最後にアフリカに戻ると云った長大な計画である。1993年、12月に南米、バタゴニアを発った一人の日本人（関野吉晴）が今ようやく北米を越えベーリング海峡を渡りシベリヤまで到着したと報告があった（グレートジャーニー5は最近放映された）。2001年、1月到達を目標に開始されたこのチャレンジ。人類と云う種族の過去からの連鎖に従い営まれてきた経過、その道筋を自分の体で感覚で味わいながら立証すると云う、大胆な探検の旅ではないか。

私は過去のそういった文献を読んだりするのが好きで、ある本に縄文人はかつては大海を航行する技術を有した種族であったとあり、その証拠に北アメリカの遺跡の中に縄文土器の様な器の欠片が混じっていたと云う。それはその昔、文化の交流があったという証。うまく海流に乗ればそれも可能な事だという。

我々一般人はこんなチャレンジは出来るはずもない。サポート隊とか、支援団体とかその他諸々なバックアップがなければ個人では出来るものではない、と思う。それも7年をかけて成し遂げようなんて。多分はテレビ局ともタイアップしてはいるのだろうが、我々サラリーマンから見ると羨ましい限りである。私ができる冒険と云ったら、長期休暇を取り海外の山に行くことぐらいである。

グレートジャーニーもこれからユーラシア大陸を経てアフリカ大陸へと向かい、どのルートを取るのか興味津々。興味のある人は、ぜひ、ご覧あれ。

（編集長）

---

季報[R&V]第31号 発行1998年 秋 発行者：本図一統  
発行所：ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318  
生 井 一 男 方

編集者：生井一男  
印刷所：やさと 印刷

---



岩壁、沢、冬山のクライミング集団